

インタビュー 宇内千晴さん

編集部 (E) 『教会福音讃美歌』のCDでは、西由起子先生の独唱やフラウエンコーアの合唱でオルガンを弾いていただき、ありがとうございました。伴奏という制約の中で、フェリスホールに設置されているパイプオルガンの魅力と可能性を最大限に引き出す演奏が印象的でした。早速ですが、宇内先生の信仰との出会い、音楽との出会いについてお聞かせください。

宇内千晴 (U) 音楽との出会いは5歳の時、音楽教室に通い始めたのがきっかけでした。その後小学5年生の時に与えられたバッハのインベンションで初めての壁にぶつかりました。仕上げるのに一ヶ月も費やしてしまったのです。しかしバッハを嫌いになることはありませんでした。そして音楽科のある上野学園中学校にピアノ専門で入学しました。中学3年生の時に講堂が新しくなり、パイプオルガンが設置されました。そこで初めてパイプオルガンで演奏されたバッハを聞き、私も弾いてみたいと思うようになりました。両親にそのことを話したところ、つぶしが効かなくなると言われ、大反対をされました。しかし反対されればされるほどオルガンへの思いは熱くなり、一年かけて両親を説得し、高校2年生の時に転科を果たしました。

しかし、喜びもつかの間、その直後に母が末期癌であることが発覚し、3か月後にあっけなく逝ってしまいました。寂しさは、私をオルガンの練習へと向かわせました。しかし土日には学校での練習ができません。そこで近くの教会を訪ねました。私の話を聞いてくださった牧師夫人から礼拝に誘われ、やがて高校生会を紹介され、そこに定期的に通うようになりました。教会は、それまでに私が経験したことのない世界でした。初めて手にした聖書のみことばは寂しさと悲しさに打ちひしがれていた私の心に染みわたっていきました。そして高校生会のキャンプに参加し、イエス様を信じる決心をし、高校3年生の時に洗礼を受けました。

■ドイツでの学び

E 高3だと受験勉強が大変ではありませんでしたか。

U 大学受験は内部進学でしたので、それは大丈夫でした。大学2年生の頃から教会音楽を学びたいと思うようになり、オルガンの先生に相談しましたところ、先生はご自分の学ばれたドイツのヴェストファーレン州立教会音楽学校(現大学)を紹介して下さいました。ドイツでは、オルガンのレッスン、礼拝で必要な即興演奏、聖歌隊指導法、金管アンサンブル、子ども聖歌隊の指導法、トロンボーン、ピアノ、声楽、グレゴリオ聖歌、合唱などの実技と共に、礼拝学、和声、教会音楽史など教会音楽家に必要なことを学びました。実技系の先生たちからは、異口同音に呼吸の大切さを教わりました。日本では音楽のレッスンは技術から入ることが多く、呼吸について言及されたことはほとんどありませんでしたので、それは大きな驚きでした。

CONTENTS

		Page
・インタビュー	宇内千晴	1
・編集作業の道のり 第9回	中山信児	4
・オーディオ・コンサートのご案内		6

E 呼吸は大切ですね。私も独学でクラシックギターを始めたとき、行き詰まって、音楽を学んでいる友人にフレージングと呼吸について教えてもらったことがあります。

U はい。呼吸は最も大切なことだと思います。

E ドイツの教会のことも少し聞かせてください。

U ドイツでは、牧師と同じように教会音楽家のポストがあります。私は留学2年目から国教会でオルガニストを務め、謝礼を頂いていました。通常はルター派の礼拝でしたが、月に一度改革派の牧師が、改革派の礼拝を行っていました。いずれの礼拝でもメロディだけが書かれた同じ賛美歌集を使用し、オルガニストには即興による賛美歌の前奏と自分で和声をつけながら伴奏することが求められました。また、礼拝の前奏や後奏で弾いた曲を記録し、それらを教会事務局を通してドイツの著作権協会に提出することが義務付けられていることには驚かされました。福音派の教会にも行きました。そこでは主にワーシップソングが歌われ、国教会から出てきた教会であると感じました。一方で国教会の中に留まる福音的なクリスチャンがいることも知りました。

■日本での奉仕

E ドイツではいろいろな学びと経験をされたのですね。それらの学びは日本でどのように用いられたのでしょうか。

U 帰国後は、まず母教会で音楽主事をさせて頂きました。そこでは礼拝奏楽の他、聖歌隊、子ども聖歌隊、音楽教室、コンサートの企画などをいたしました。その後、東京基督教短期大学（東京基督教大学の前身校）とフェリス女学院大学でオルガンを教えることになりました。現在フェリスでは、主に教会音楽の科目を担当しています。メインの仕事は東京基督教大学（TCU）で、教会音楽主任をさせて頂いています。TCUではドイツで学んだすべてのことを総動員し、オルガンのレッスン、教会音楽主事に必要な実技系科目、礼拝学の音楽に関する部分などを担当している他、公開講座、コンサートの企画、千葉刑務所のクリスマス礼拝のボランティアなどにも関わってきました。また、TCUでの大きな仕事の一つがパイプオルガンの管理です。設置前から関わっていますが、このオルガンは、“Soli Deo Gloria”（ただ神にのみ栄光あれ）という宗教改革の精神を表す楽器で、音楽的には教会音楽の最高峰であるJ.S. バッハの作品がふさわしく演奏できる歴史的建造法によって製作されています。しかし、当時の楽器の忠実な再現ですと現代日本の教会音楽のニーズに対応できないこともありますので、基本的なコンセプトは崩さず、それらにもある程度対応できる楽器を作させて頂きました。



宇内千晴（うない ちはる）

上野学園中学・高校音楽科・同大学器楽学科オルガン専門卒業。ドイツ、ヴェストファーレン州立教会音楽学校（現大学）卒業。カントール資格（教会音楽家）を取得。オルガンを廣野嗣雄、A. シェーンシュテット、J. N. ケラー各氏に師事。その後、スイスのロラムティエ、イタリアのピストイア、スペインのサラマンカで行われた国際オルガン音楽アカデミーにて研鑽を積む傍ら、同地でコンサートを行い好評を得る。ピストイア受賞。

オルガニストとして演奏活動続ける傍ら、東京基督教大学において公開講座「教会音楽・神学公開講座」「パイプオルガンさん こんにちは」などの企画に取り組み、牧師と教会音楽奉仕者の協働の推進、教会音楽奉仕者の育成、及びオルガン音楽の魅力の発信に力を入れている。春日部福音自由教会音楽主事を経て、現在、東京基督教大学教会音楽主任、フェリス女学院大学音楽学部講師。日本オルガニスト協会、日本オルガン研究会会員。

E 歴史的に忠実に再現するだけでなく、今、この時に、神の栄光のために用いられるように作られたオルガンということですね。

U はい。私はパイプオルガンを導入したいという相談を受けることがあるのですが、なぜ導入したいのかを尋ねると「バッハを弾きたいから」という答えが返ってくるのが少なくありません。その場合は、もう少し具体的に「礼拝でどのような賛美歌が歌われているか」「礼拝以外でオルガンをどのように使いたいのか」などについて考えて頂くようにしています。

E 先生ご自身が、奏楽者として心がけていることがあれば教えてください。

U 奏楽者としては、説教者が聖書に真摯に向き合うように、楽譜に真摯に向き合い、楽譜を通じて作曲者・作詞者に向き合うことを心掛けています。作曲者・作詞者の意図を汲み取った上で、そこに自分の人生や感性を加えながら音を紡いでいくこと、それが演奏家の本分ではないかと思います。同時に楽器に向き合うこと、つまり、その楽器の構造を理解し、楽器が鳴りたいように鳴らしてあげることも大切だと思います。そして私自身は通り良き管になること。そのような状態で奏でられる音楽に乗って会衆が自発的に、のびのびと歌う声が聞こえてくる時、私は奏楽者冥利に尽きる思いになります。

■多様性とプロフェッショナリティ

E ところで、私もいろんなジャンルの音楽を聴くのですが、TCUではシンガーソングライターの岩渕まことさんが、講師として教えておられますね。

U はい。岩渕先生は、演奏面でも機材の操作でも、プロの演奏家の視点で、学生たちを指導してくださっています。岩渕先生は、延長コードの巻き方や整理の仕方を見るだけで、その教会の音楽レベルが分かるとおっしゃいます。

E プロの目線はすごいですね。音楽のスタイルのことでは、こだわりが強すぎると新しいものが出にくくなる一方で、多様性を認めることは豊かさに通じるように思うのですが、その点は、いかがでしょうか。

U はい、そう思います。しかし音楽は嗜好性が強いものですから、それは簡単なことではないと思います。まずは音楽スタイルの是非を議論する前に「礼拝」や「賛美」という言葉の意味を正確に理解する必要があるように思います。また公同の礼拝やそこでの賛美には、広い視野とプロフェッショナルな意識が求められると思います。そしてそれ以前に大切なことは人と人との信頼関係を築くことではないかと思います。目の前にいる人を大切にする視点、それぞれの歴史を大切する視点があって欲しいと思います。

E それは説教者や牧会者においても大切なポイントですね。

U 教役者の皆さんが音楽を学ぶことも、とても重要なことだと思います。特に礼拝で歌われる賛美歌は説教と連動すること多いと思いますので、教役者が賛美歌について理解することはとても大切であると思います。賛美歌は、会衆が神様にささげるものであると同時に、一人一人の内面に取り入れるものでもあります。歌詞の内容や音楽は吟味されたものであって欲しいと思います。選曲を任される教役者、音楽奉仕者の責任は大きいと思います。TCUの教会音楽専攻科では、卒業後に音楽主事として奉仕ができる学びをしています。卒業生が教会の現場で教役者と協働してキリストの教会を立てる働きをしてくれることを願っています。また、将来的には有給の音楽主事のポストが増えることも願っています。同時にTCUからは音楽に理解のある教役者や信徒が巣立っていつてくれることも心から願っています。

■『教会福音讃美歌』について

『教会福音讃美歌』（2012年）では、ジャンルやスタイルを越えて、新旧いろいろな讃美歌を収録しましたが、内容や編集方針について感想があればお聞かせください。

U ある先生が『教会福音讃美歌』は「良いところ取り」と言われましたが、私もそう思います。『讃美歌21』（1997年）、『新聖歌』（2001年）、『聖公会聖歌集』（2006年）などの良いところを受け継ぎながら独自のものも加えておられますね。

E ありがとうございます。確かに、私たちは自覚的に「良いところ取り」をしてきたと思います。本当に良いものを作りたいかったので、自分たちだけで全部作ってやろう、という発想はありませんでした。その意味でも、先に歌集を出された皆さんには本当に助けていただきました。同時に、次に誰かが新しい讃美歌集を作るときには「どうぞ私たちを踏み台にしてください」という気持ちで仕事をしています。

U いろいろな人たちが歌える賛美歌が収録されていて、壁をのり越える取り組みがなされていると思います。そこが『教会福音讃美歌』が広く受け入れられている理由だと思います。

ただ、オルガニストの立場から言わせて頂くと、新しい賛美歌の中にはオルガン伴奏向きでないものがあります。伝統のある教会で、新しい賛美歌が浸透しにくい理由のひとつに、伴奏楽器の問題があるのではないのでしょうか。

E 確かにその問題はありますね。一方で、ケンドリック、タウネンド、ゲティなどは、いろんなアレンジで歌える讃美歌を作っています。良い讃美歌には、どんな楽器を使っても、どんなアレンジで歌っても、心に響くものがあると思っています。

U キリスト教主義の学校では、パイプオルガンで礼拝の奏楽をする所が多いので、それがノンクリスチャンの生徒たちにとっては最初の礼拝体験になります。彼らが教会を紹介されて礼拝に出席し、そこでは全く違った形で賛美の歌が歌われていると、そこに大きなギャップを感じるようです。音楽の面から考えると、多種多様な音楽ジャンルによる賛美歌は、それにふさわしい楽器で伴奏ができるのが理想だと思います。今のところ残念ながら日本の教会にはそこまでの力はないので、より良いあり方を求める努力していければと思います。また、オルガニストとしては、パイプオルガンで伴奏するのに適している賛美歌が生まれてくることも期待しています。

E 今日は、多くの大切な課題についてお話しくださり、本当にありがとうございました。

『教会福音讃美歌』編集作業の道のり 連載第9回

福音讃美歌協会 讃美歌委員 中山信児

1. オリジナル讃美歌の創作

『教会福音讃美歌』には、日本語のオリジナル作品で大部の讃美歌集に未収録の讃美歌が、約40曲収録されています。その中には、すでにキャンプや青年集会などで良く用いられてきたものや、小歌集や自費出版などで公にされていたもの、作者の属する教会などで歌われてきたものなどがあります。

それらに加えて、『教会福音讃美歌』のために新しく書き下ろされた讃美歌が10数曲あります。新しい讃美歌が生まれる時には、次の三つの要因が働いています。「インスピレーション」と「出会い」と「必要」です。

一つの事例として『教会福音讃美歌』58番「主の愛のことばで」を紹介したいと思います。作曲者の大島章義さんがこの曲を作った背景には、一つのストーリーがありました。大島さんは、軍政下にあったミャンマーのキリスト教孤児院に義援金を届けに行く中で、ミャンマーの現実、そしてそこに生きる人々との「出会い」を体験され、教会が「主の十字架によって行き場の無い者に居場所を与えていることに感銘を受け、賛美をしたい」という「インスピレーション」を与えられて、「ミャンマー」という曲を作曲しました。最初、歌詞はついていませんでした。

他方、私たちは、今から9年前ですが、新しい讃美歌集を作るために協力者を「必要」としていました。その求めに応じてくださったのが大島さんでした。私たちには、また、新しい讃美歌集に日本人の手によるオリジナル作品を収録したいという「必要」もありましたが、大島さんは、ご自分が作曲した「ミャンマー」に説明を付けて提供してくださいました。

ここにおいて、私たちは人と作品との「出会い」を持つことができました。この「出会い」は、作詞者の「インスピレーション」を喚起しました。大島さんの作品を持ち帰り、一緒に送られてきた作品についての説明を読みながら、一晩で歌詞が書き上げられました。この作品の場合、「出会い」は、人為的と言うより、見えざる主の手に導かれた幸いなものであったと言えるでしょう。

もう一つのかたちがあります。それは委嘱というかたちです。『教会福音讃美歌』では、委嘱によって創作された讃美歌が「教会の営み・礼拝と諸式」の項目にいくつか収録されています。献児式や祝福式に歌える285番「子どもを愛する主の御前に」、母の日や父の日のための286番「私を見つめ」、高齢者祝福式などで用いられる287番「主とともに（敬老）」がそうです。

いずれも『教会福音讃美歌』編集の最終段階で、ことば遣いにおいても内容においても現代の教会の諸式にふさわしい讃美歌が「必要」とされ、それぞれ委員に委嘱されました。

このようなケースでは、「出会い」はどちらかというとな人為的、意図的なものになり、「インスピレーション」も喚起されるというより、苦しみながら待ち望むようなものになるかもしれません。しかし、現実の「必要」に応えるという点では、このようなかたちにも大切な意味があります。

翻訳や借りものではない日本人の手によるオリジナル讃美歌の創作は、まだ十分自覚されていないけれども、日本の教会にとって大きな「必要」であり、大切な課題です。この課題に応えるためには、賜物、才能、重荷、関心を持つ人たちが、互いに出会って、助け合い励まし合える環境が必要です。讃美歌委員の土井康司さんが「ミャンマー」について書いた文章を紹介します。「『歌詞は作れるけれど曲は作れない』とか『曲は作れるけれど歌詞は作れない』という人は多いのではないのでしょうか。作詞と作曲という2つの賜物がそろわなければ歌は生まれません・・・福音讃美歌協会が今後もこのような出会いの場として用いられることを願っています。」（『福音讃美歌ジャーナル』vol.7）

最後になりますが、私たちは、すでに生み出されているけれども、まだ世に出ていない優れた讃美歌との「出会い」も、「必要」としています。

CD『教会福音讃美歌』全5巻 完成記念イベント

あなたの教会で「オーディオ・コンサート」を開いてみませんか

今年の1月にCD『教会福音讃美歌』全5巻シリーズが完結いたしました。多くの方の祈りと協力をいただいて、内容、演奏、録音のいずれにおいても、クオリティの高いCDができたことを感謝しております。

福音讃美歌協会では、CDシリーズの完成を記念して、いのちのことば社と共催で「オーディオ・コンサート」を企画いたしました。「オーディオ・コンサート」は、教会を会場として、講師の解説によって讃美歌に対する理解を深めながら、CDに収録された讃美歌をオーディオで鑑賞する集会です。

普段、自宅では大きな音で教会音楽を鑑賞することができない方、讃美歌の解説を聞きながら、教会で讃美歌の録音を聴いてみたい方など、教会音楽や讃美歌に関心のある多くの方にご集っていただき、讃美に親しんでいただく機会となれば幸いです。

■「オーディオ・コンサート」概要

1. オーディオ機器は、福音讃美歌協会でご用意したものをご利用いただくことができます。
貸出費用（送料含む）は無料です。（下記「使用オーディオ機器」参照）
2. 実際にCD制作に関わった者が、教会のご希望をお聞きしながらCD収録曲から選曲し、当日会場に伺って解説をいたします（要日程調整）。
3. 講師謝礼は不要です。（交通費についてはお問い合わせください）。
4. 会場では、1枚2,700円（税込）のCD『教会福音讃美歌』1～5巻を1枚2,500円（税込）で販売することができます。
5. 福音讃美歌協会の働きのために自由献金の機会をいただければ感謝です。

■使用オーディオ機器（プロケابل社）

- スピーカー BIC DV62si（16.5cm ウーファー 2way 能率:90db アメリカ）
- パワーアンプ thomann S-75mk2（AB級アンプ 45ワット×2 ドイツ）
- 音源用ケーブル Neumann（ドイツ） ●インシュレーター ソルボセイン

「オーディオ・コンサート」を通して、讃美がさらに親しみ深いものとなりますように願っています。「オーディオ・コンサート」に関心のある方は、福音讃美歌協会までご連絡ください。

■お問い合わせ：福音讃美歌協会

メール：info@jeacs.org

電話：03-5341-6920 ファックス：03-5341-6921（いのちのことば社出版事業部内）

＊会計報告＊

■収入の部■

2017 年 4 月～2017 年 9 月

科 目	2017 年度予算	2017 年度中間報告
会員負担金	1,210,000	723,000
（正会員）	(750,000)	(500,000)
（準会員）	(60,000)	(0)
（賛助会員）	(400,000)	(223,000)
自由献金	600,000	316,500
その他	0	1
当年度収入合計（A）	1,810,000	1,039,501
前年度繰越金	486,145	486,145
収入合計（B）	2,296,145	1,525,646

■支出の部■

科 目	2017 年度予算	2016 年度中間報告
理事会費	95,000	27,342
委員会費	300,000	116,520
人件費	390,000	210,000
事務費	205,000	100,762
ジャーナル発行費	400,000	178,720
カンファレンス開催費	165,000	0
総会開催費	20,000	5,520
JEA 関係費	63,000	82,846
経常支出合計	1,638,000	721,710
特別支出 積立金	100,000	0
予備費	350,000	0
当年度支出合計（C）	2,088,000	721,710
当年度収支差額（A）-（C）	- 278,000	317,791
繰越額／残高（B）-（C）	208,145	803,936

●賛助会費納入者（2017 年 4 月～2017 年 9 月）

板橋キリスト教会、聖宣神学院キリスト教会、馬天キリスト教会、菅生キリスト教会、立川キリスト教会、キリスト教朝顔教会、都賀キリスト教会（7 教会）

福田崇・愛子、聖宣神学院キリスト教会婦人会、小川宣嗣、寺村秀嗣、熊谷邦男、稲垣博史・緋紗子、山村雅彦、南場安正、大賀勝範、安西仁美、斎藤眞木子、林慎一郎・頼子、菅原早樹、横倉智恵、本間昭弘（個人、その他 15 件）

●献金者（2017 年 4 月～2017 年 9 月）

武蔵台キリスト福音教会、泉キリスト教会、本間昭弘、三森美智代（4 件）

お名前の掲載を希望されない場合は、通信欄に匿名希望とお書きくださるか、メール（info@jeacs.org）で、その旨をお知らせください。

『あたらしい歌2』

2017年11月発売 いのちのことば社 800円(税別)



1. 全地のすみずみまで (Let all the world in ev'ry corner sing)
2. 聖なる我らの神
3. 道なる主イエス (Come, my Way, my Truth, my Life)
4. ひかるよひとつぼし
5. しずかな夜に (Little Jesus, sweetly sleep)
6. 主のひかりが夜を照らし
7. 真冬のさなか (In the bleak midwinter)
8. 暗い園でひとり祈る主 (When you prayed beneath the trees)
9. 「光よ あれ」と
10. わがたまよ、主をたたえよ
11. 喜びたたえよ、われらの神を
12. 七つの燭台の
13. 主の前で (When the music fades / THE HEART OF WORSHIP)
14. あなたの愛を身にまとい
15. 深い川よ (Deep River)
16. 善き力にわれかこまれ (Von guten Mächten)
17. イエスを知る喜び (All I Once Held Dear / KNOWING YOU)
18. 主イエスのもとに行き (Go, carry thy burden to Jesus)
19. 私たちを一つにしてください
20. アーメン

作者・訳者：ジョージ・ハーバート、クリスティナ・ロセッティ、グスタフ・ホルスト、ディートリッヒ・ボンヘッフアー、エリック・ラウトリー、グラハム・ケンドリック、マット・レッドマン、天海和彦、荒瀬牧彦、岩渕まこと、植木愛、植木紀夫、遠藤稔、大和田広美、小川宣嗣、関根一夫、土井康司、中山信児、林直也、渡辺真理、渡辺晃子、黒人霊歌、他

■福音讃美歌協会◆会員募集◆

- ◇会員には次の三つの種別があります。正会員（教会、教団・教派等）、準会員（超教派団体、グループ等）賛助会員（趣旨に賛同し支援して下さる教会、個人等）
- ◇賛助会員のお申し込みは、入会申込書をご請求いただき、必要事項をご記入の上、郵便またはFAXでお送りください。承認の後、年会費のお振込みにより入会が完了いたします。
- ◇正会員、準会員のお申し込みにつきましては、協会へ直接お問い合わせください。

福音讃美歌協会 (JEACS) 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCCビル 602号室
Tel.03-5341-6920 Fax.03-5341-6921 (いのちのことば社出版事業部内)
ホームページ <http://jeacs.org/> メール info@jeacs.org

◆郵便振替口座◆

番号 00220-1-95127
名称 福音讃美歌協会

◆郵便貯金口座◆

番号 10500-82654721
名称 福音讃美歌協会

◆みずほ銀行 ユーカリが丘支店◆

普通預金 番号 1604668
名称 福音讃美歌協会

From Editor

このジャーナルが、皆様のお手もとに届く頃には、20曲収録の小讃美歌集『あたらしい歌2』が書店の棚に置かれていくことでしょう。

今から8年前、私たちは、札幌で開催された日本伝道会議に合わせて『あたらしい歌』を発行しました。そして『教会福音讃美歌』発行から5年が経った今年、『あたらしい歌2』を、皆様にお届けできることを、感謝しております。

最初の『あたらしい歌』は、本格的な讃美歌集編集の準備として取り組まれました。この一冊から、作詞、作曲、編集について多くのことを学び、多くの人や組織との関係を持つことができました。

『あたらしい歌2』にも、将来の大改訂への準備という側面があります。それが十何年後、何十年後になるかは分かりませんが、将来の働きを担う若い人材の発掘と育成、創作や編集のノウハウの継承、そして讃美歌に関わる人や組織の関係を広げながら、讃美歌を取り囲む環境を整理していくことは、継続して取り組まなければならない大きな課題です。

今号の巻頭を飾った写真は、盛岡聖書バプテスト教会の近藤愛哉牧師が撮影された「錦秋湖」(岩手)の風景です。美しい写真の使用を快諾してくださったことを感謝いたします。

(な)